



お蔭久しく御座候御座候、其大兄御近執  
奈何お生は例の如く愚も付かぬうらや  
病あり、感懐おと、献性おと、哀憤あり、思  
疾あり、蒙りたり、累たり、迄まして達せお  
喪ふて得おたじくじぬる哉と預

大兄よ人生とはいかにあるものぞ秋ふ一友何一先日  
書お空のせし目く「史記傾愚ふして才学はんが  
如ふるよ蒲柳に所あり経世濟世、人自ら別あり  
らん秋は唯信に風月お果んで父母子後れおん

のりしとあの人仁ふは秋はおやあの人悟れるふは  
近からおめ

了、大兄よあの人仁ふ近しあの人悟れるあり然れど  
もア、大兄よ直情一往あの人送はむおれどもあ  
人の情は浅きあり、秋孝の情は漫散あり疎  
暑おあり乱ふ入れり、乱ふは入れど秋孝は情の深  
きあり、ア、大兄よ熟れか是子しし熟れか非なるべき  
悟と樂とは別おわめ大悟は大悲あり大兄閑  
よ杖頭に鍊かけし奈良よ遊び玉はい名匠の



手におりし佛の慈悲顔お園一玉八心お其



子杖頭に鍊帳かけし奈良子遊び玉はい名匠の



手よりし佛の慈悲顔は園一玉へ心お其  
相も満斛の慈悲帳たどへおさかすものあるべし  
心弱き者は禍ある哉求めし得らるべも唯一の珍  
宝の一悲字あるよ思ひ到れしとき、

大見よ餘善山の端よかき月も雨階のうきは沈井  
希聖の光も流も白も雨階の中こめおむ、生  
生る、

此何れか涙 ありあるべき大見よルお正は涙の聖  
者ありおや

心乱れ居ればおのまのまのさう角違ひあるは免し

許へ

寧ろまのいあり

秋は秋外先生は尊べども教はむ、直道(宙外  
抱月の後は誤れるものあり、上田敏氏の如きは干  
鬼夜あるは是の如く自余流非軍唯し一面誤  
する可おんか

兄よ僕は昨夜上野よりけり途上忘るべきを食見  
よ一鉢の恵おさんとして能はむりも聞き玉へ秋も  
独も不幸ありしお、彼よして羞し杯も暗き所  
人げおき所して請ひしおらば秋は独の年候とりて



心あり悲ふべかりしありあやなく字は光眩を雨

人げぢき所にて請ひしおらば我は徳の年候とりし

怒るゝ悪ふべかりしあり あやなく 徳は光眩を雷  
 燈の下人通り鏡字を所こありしかば我は踏踏せ  
 り知り人子見られもやせん 偽善者とも思はれんと  
 思ふありしは我あり、去れど見れば我は徳に熟れ思  
 へ 今日の子も臆気おく 偽善者おしうるものは平  
 ありし、今日の我は我善の如き 衆法者おは為せ  
 人と欲する 偽善すらし 許さぬ事あり、今日の  
 世は偽善者おすなり 人は高き 苦痛は忍ばるべか  
 らあるあり

Art for the sake of the poor 貧者の代表者け

政治、教の徒あり

戯作者気風の丹ニ記述は硯友社あり

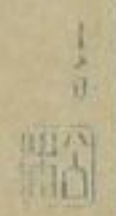
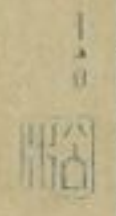
常識の外に貴おべきもの知らぬ 擔板漢は

直達 宙外の徒あり

大動在し、これ 文界は其善の徒の執力環

ニあるあり

東洋画報と申す 雜誌 独歩先哲とて



東洋画報と申す雖も独歩先杯將とて  
出でた上、市販おくば市送り申すへきか  
山以迄出せんとし一花し

悪報の祝宴会によればしシヤンパン杯飲み  
申すは有明までし古此糸油の流るる僕

何れか僕も若菜子近よれり  
近來酒杯飯むも樂しからず、後おるも人  
おし

死か生か  
昂々然とし一秋は命運の犠牲とあらん

李太白諺曰天生材才必有用千金散尽却  
復来

逍遥謡曰一生不醉浮世酒

韓偓曰自笑計狂独説  
誰憐夢好独相思

酒生契兄

友の愛杯唯一の福音と信ずる  
無景度 三萬里  
醉後

中澤臨川書簡 小島文八宛



本問文庫  
文庫 14  
C109

